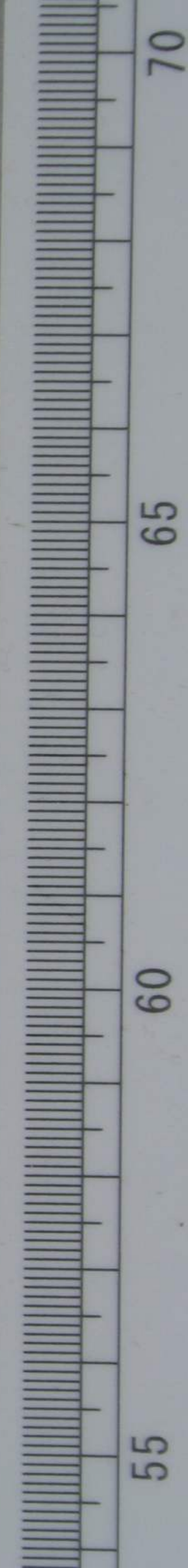


民 謠 集

後 別

野 口 雨 情 著



55

60

65

70

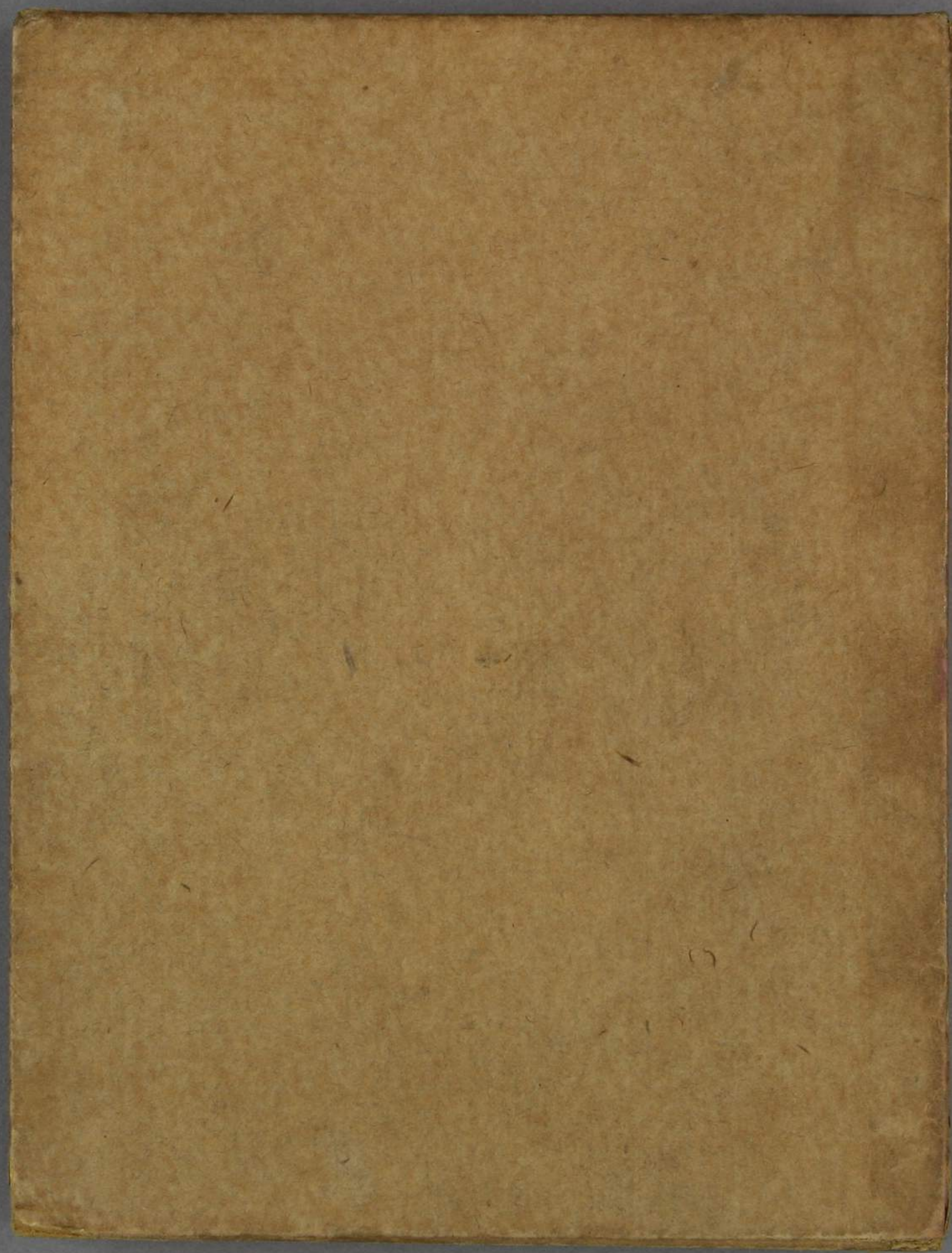
民集

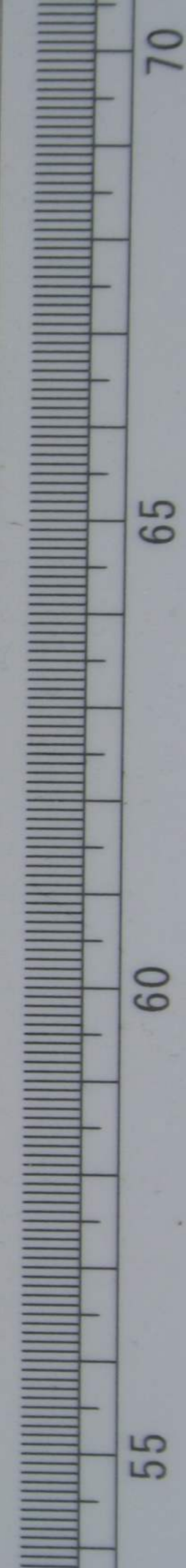
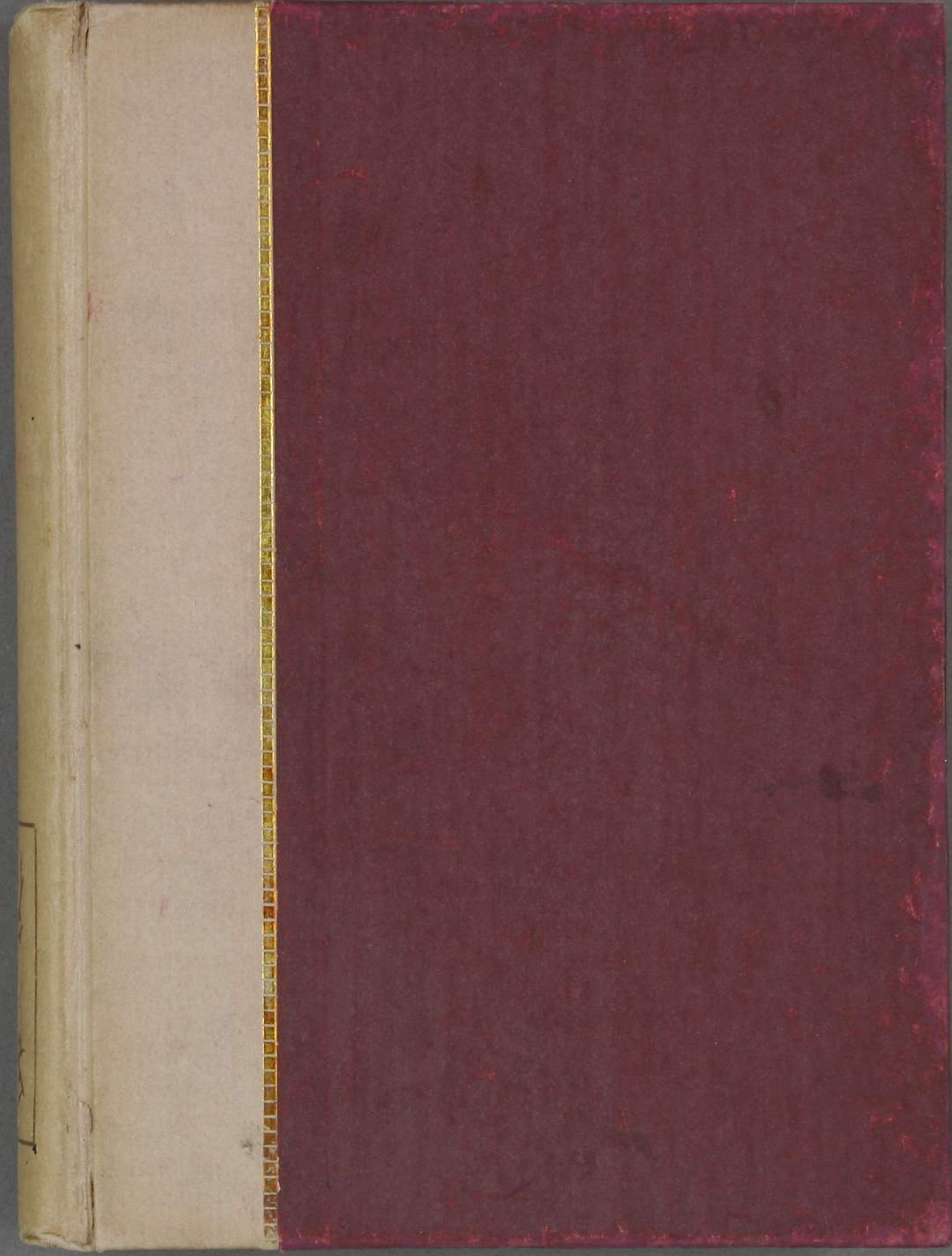
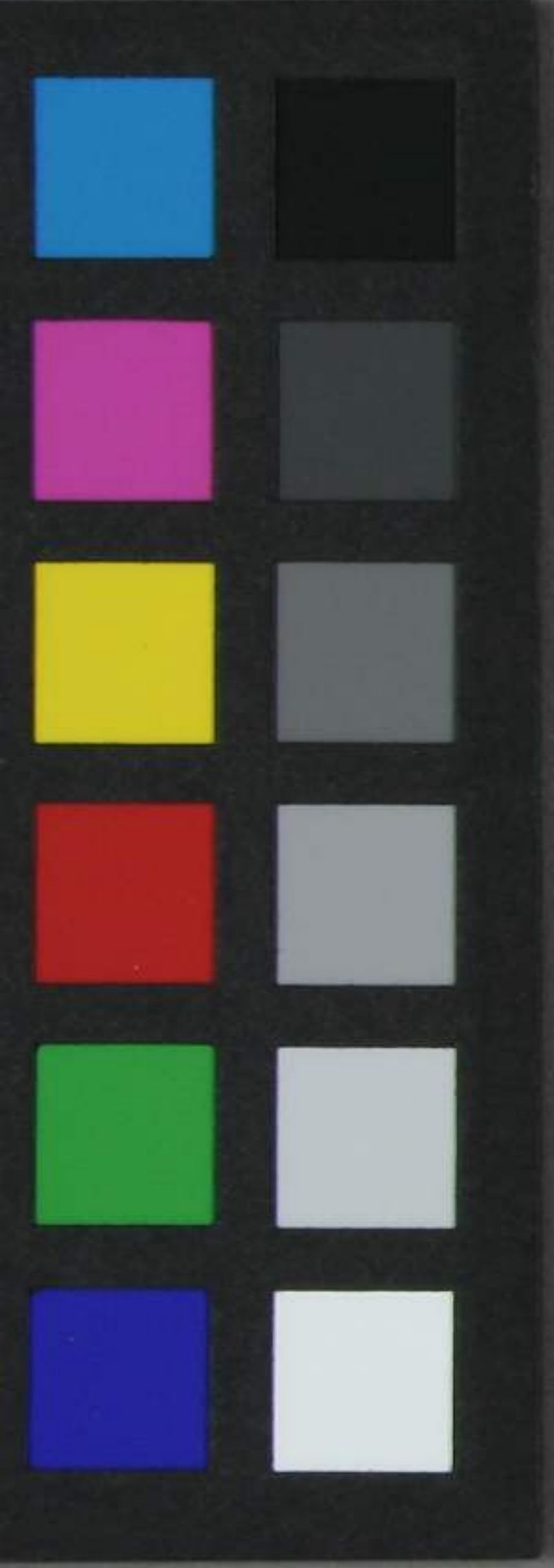
別

後

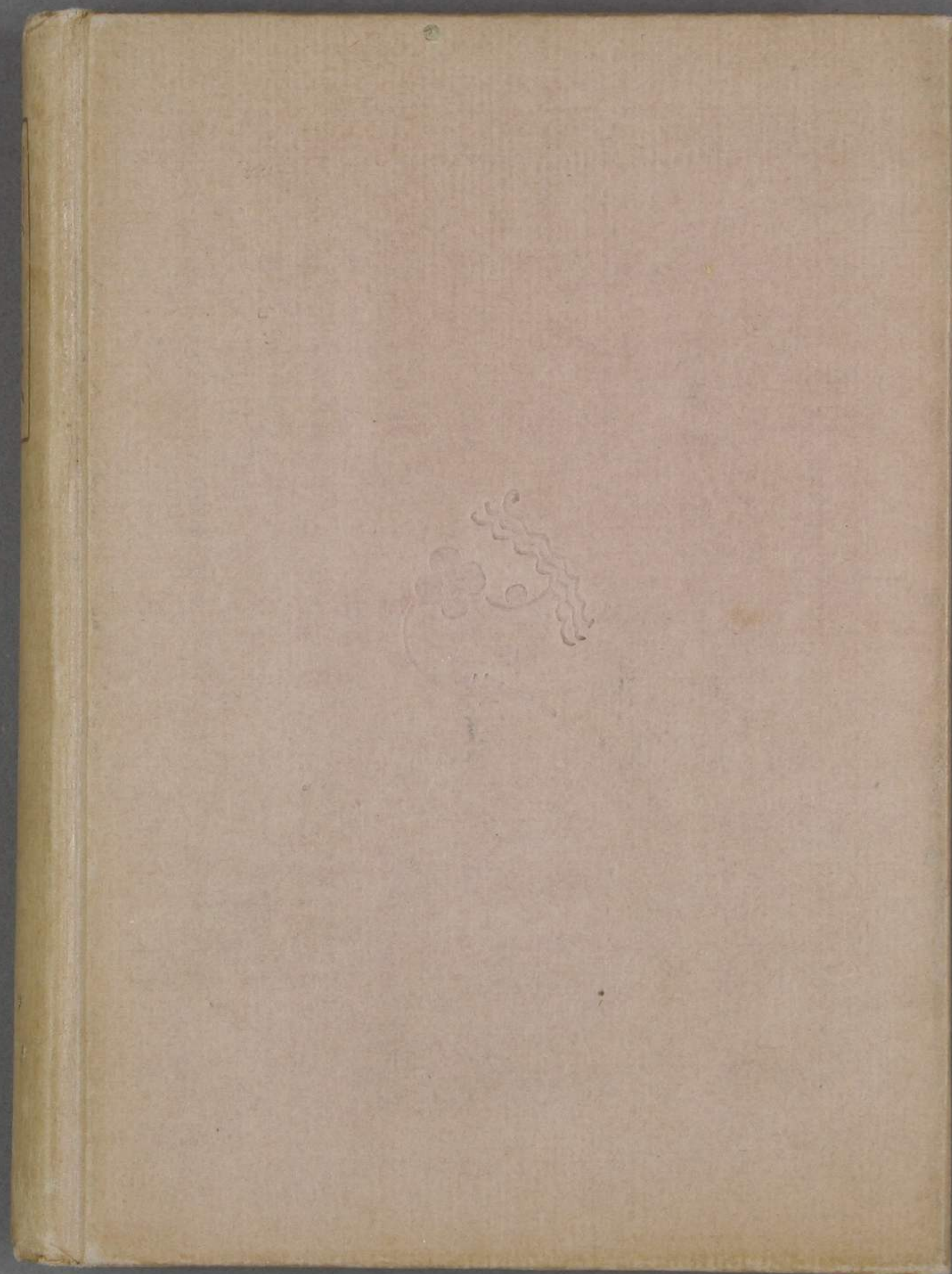
野口雨情詩  
第三編

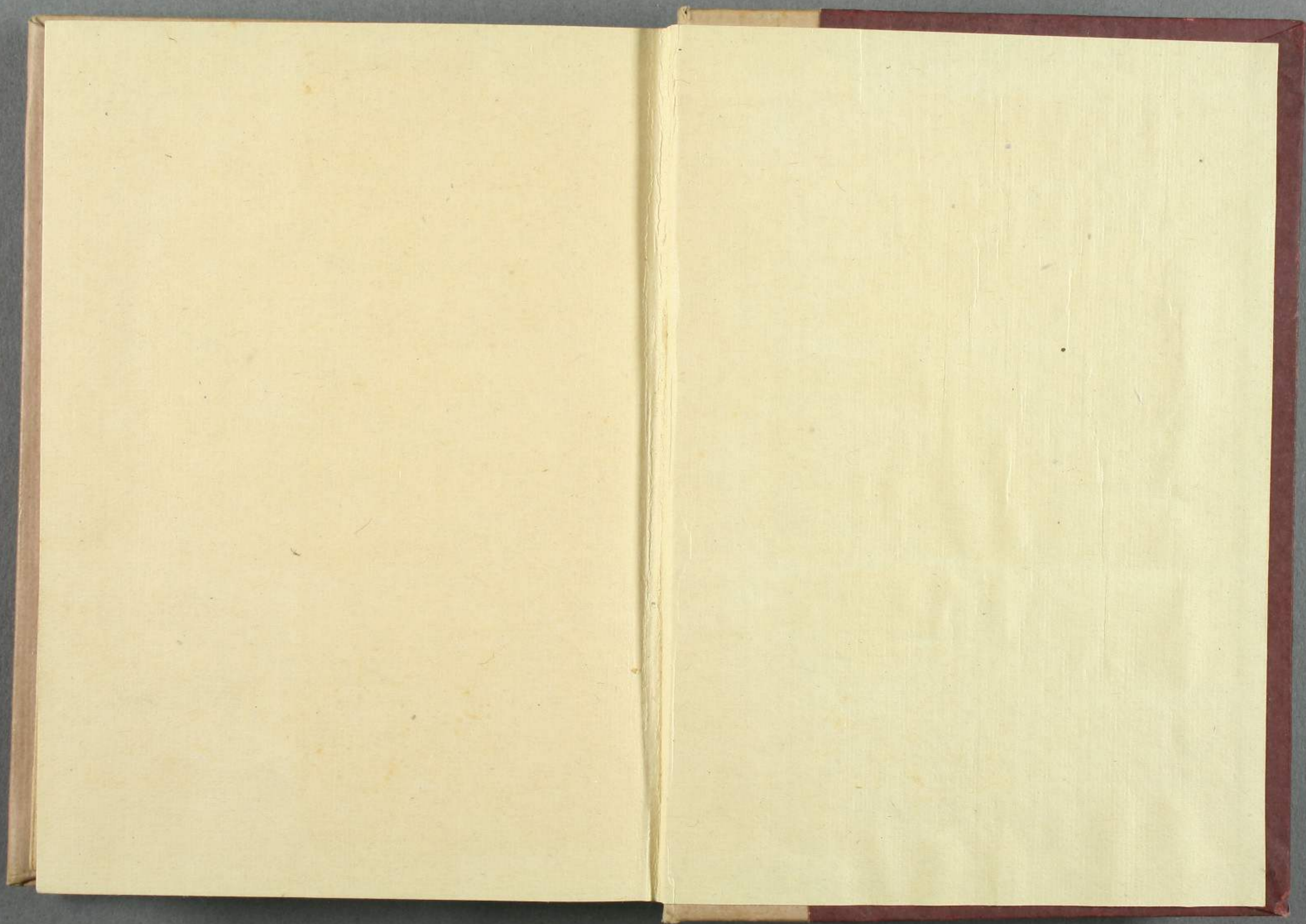
野口雨情著





別後

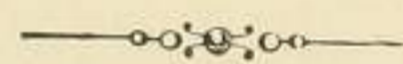




民 謠 集

後 別

野 口 雨 情 著



東 京

尚 文 堂



子安貝

なぎーさの なぎさーの こやーすかーひ  
なみーさんさ なみさんさ こやーすかーひ  
けふからふたりのてくらしませうー  
おまーへも わたしーもー こやーすかーひ

目次

旅の鳥	萱の花	おたよ	焼山小唄	別後	別後
.....	.....	.....	.....	.....	.....
一六	二三	九	五	二	一



乙	鳥	二
空	飛ぶ鳥	四
枯	山唄	七
祇	園町	一〇〇
霞	の中	一〇三
戀	の日	一〇八
澤	の螢	一一一
豌豆	の花	一一五

子	安貝	九
つ	ぶりこ	七三
一	軒屋	七五
武	藏野	七六
か	なく蟬	八二
お	かよ	八三
白	露虫	八五
雁		八六

籜	風が吹く	生姜畑	芒の葉	磯の上	お春娘	渡り鳥	十文字
籜	籜	畑	葉	上	娘	鳥	字
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一七	一三	一六	一七	一五	一四	一四	一三

下總のお吉	草	儂	悲しき戀	土藏の壁	散る花	鳥	豌豆の花
お吉	萌	日	戀	壁	花	鳥	花
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一六	一四	一三	一八	一五	一三	一九	一七

別  
後

子 安 貝 ..... 本居長世作曲	人 買 船 ..... 一七	女 工 唄 ..... 一八	夢 の 穂 ..... 一七	お 糸 ..... 一七	霜 枯 れ ..... 一七	螢 草 ..... 一七
--------------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------

別後

逢<sup>あ</sup>ひは しませぬ

見<sup>み</sup>もしま せぬに

わしの この村<sup>むら</sup>を

馬<sup>うま</sup>に乗<sup>の</sup>つて 通<sup>とほ</sup>つた

馬も嘶く

わたしも泣いた

逢はれないのに

逢ふ氣で來てる。

### 焼山小唄

五條館の

女郎は

山に雉子啼く

日であつた

被衣かづいて



片岡の

馬に乗られて

まへられた

馬が嘶きや

女郎は

かつぐ被衣に

顔かくれ

雉子が啼いてる

いただきの

山の麓を

越えられた

越えたその夜に

いただきの

山は焼けたが

野は焼けず

芒尾花は

片岡の

馬に喰はれて

芽が萌えた。

おたよ

ゆうべ厨の

水甕に

小首かたむけ

聞きほれた

おたよは脊戸の

きりぐす

月の夜なれば

晝顔の

蔓の葉に啼く

虫の音を

おたよ十六

なんと聞く

をとめの胸を

をどらせし

同じ夢見た

そのあした

逃げて失せたも

きのくす。

萱の花

誰に見よとて

髪結ふた

西の山には

萱の花

誰に解かそと

帯締めた

東の山にも

萱の花

萱の枯葉に

だまされた

お綱さまはと

懸巢啼く。

旅の鳥

山やまに春雨はるさめ

野のに茅花つばな

花はなのかけかは

つばくらめ

去年きょねん常陸ひたちの

ふるさとの

山やまに來きました

つばくらめ

雨あめは降ふれども

つばくらは

花はなに寢ねもせぬ

旅の鳥

野にも山にも

春雨の

雨は糸より

細く降る

三度笠

馬に乗られた

三度笠

手綱とられた

黄楊の櫛

雁が啼くから

あれ聞けと  
城下通れば  
馬が言ふ。

夕 焼

山のふもとの  
遠方は  
雲雀囀る  
青野原  
聲は遙に



夕暮ゆふぐれの

空そらはおほろに

花はなぐもり

雲雀ひばりまへづ囀なげる

遠方をちかたの

山やまのふもとの

大空きそらは

夕燒ゆふやけこやけ小燒こやけの

日ひが暮くれて

櫻いくらまつがは眞赤まっかに

みんな燒やけた。

河原柳

南風吹け

麥の穂に

河原柳の

影法師

最早今年も

澤瀉の

花はちらほら

咲きました

待ちも暮しも

したけれど

河原柳の

影法師

山に父母

蔓葛羅

何故にこの頃

山戀し

藪に茶菓の木

野に茨

茶菓も茨も

忘れたが

藪の小蔭の

頬白は

無事で居たかと

啼きもした

山に二人の

父母は

藪の小蔭の

頬白は

河原柳の

花も見ず

南風吹け

麥の穂に。

鳴子引

淀よどの河原かはらの

雨あめ催もよほひ

萩はぎの眞ま白しろき

穂ほはそよぐ

いそけ河原かはらの

川かは舟ふねに

菅すげの小こ笠がさの

鳴なる子こ引ひき

河原かはら鷗う鳴なく

淀よど川がはの

小笠こがさかづぎし

花はな 娘むすめ

河原蓬かはらよじぎの

枯れし葉かに

かへる小舟こぶねの

櫓ろが響ひびく

唄うたへ 花妻はなづま

花はな 娘むすめ

淀よどの川舟かたふね

日ひが暮くれる

菅すげの小笠こがさに

三日月かづきの

眉まゆをかくせる

鳴なる子こ引ひき

鳥

風に吹かれて

そよ／＼と

山の枯葉は

皆落ちた

木會に木櫃の

實は熟す

かへれ信濃の

旅鳥

茶の樹畑の

豆食ひし

鳩は畑の

どこで啼く。

みそさざい

わたしの姉さん

篠藪で

さつさ お脊戸の

鳩 鶉

誰にも言はずに



ゐてお呉れ

去年きょねんの暮くれにも

篠藪しのやぶで

さつさ お脊戸せきどの

鶺鴒みそ 鶺鴒みそ

誰たれにも言いはずに

ゐてお呉れ

荒  
野

荒野

花はなと云いふ花はなは咲さけども

妻つまと云いふ

花はなは咲さかない

おお 淋さびし

荒野の果てに

咲く花は

妻と云はりヨか

おお 淋し

風に吹かれて飛ぶ雲は

荒野の 果ての 野の 果ての

わたしに 何んで  
戀しかる。

相馬街道

相馬街道の

馬追さんは

肩で風切つて

南へ通る

未通娘は

おほろに紅い

咲いた櫻も

おほろに紅い

田甫鳥か

馬追さんは

未通だまして

二度来てくれぬ

相馬街道の

馬追さんよ

未通娘に

何に變ろ。

機屋の窓

助さんく

この助さん

東に花妻

真中に

川端柳の

木の枕まきのまくら

助さんすけさんく

この助さんすけさん

くぐもり小濱こはまの

海の音うみのねは

機屋はたやの窓まどまで

響ひびくぞへ。

哀別

海は見たれど

海照らず

山は見たれど

山照らず

時雨の雲の

雨の戸に

わがためぬれた

人もあり

中仙道は

山の國



常陸鹿島は  
海の國

これがたまぐ

五十里の

山を越えたる

別れかよ

鳥しば啼く

しばらくは

山のあなたで

啼けばよい

今宵一夜を

哀別あゐべつの

涙なみだで共ともに

語かたらうよ。

小室こむろの小篋せうけつ

裏戸うらと覗のぞいて 裏うらから

歸かへる

紺こんの前掛まへかけ 麻裏草履あさうらぞうり

あなた一人ひとりに

情立じょうたてましよと

泣ないてわかれた 小室こむろの

小こ篋さき

裏戸うらこ覗のぞいて 裏うらから

歸かへる

紺こんの前掛まへか 麻裏草履あさうらぞうり。

## 十一橋

ほんに潮來いたこへ

おいでなら

佐原來栖さばらいけすに

お茶屋ちややがござらう

姉あねさめしませう

のう姉あねさ

花はなのかむろが後朝きんぐの

雨あめは涙なみだで降ふるぞへのう

一夜ひとよかりねの

手枕てまくらに

旅たびの妻おかたと唄うたはれて

明日あすは耻づかし のう姉あねさ

臯月さつき照てれ照てれ

菖蒲あやめも植うゑよ

お女郎じやうら見みましよか十六島しじまは

雨あめの降ふるのに花はなが咲さく。

夕の空

日の暮れ方に

空見れば

いつもはかない

ことばかり

すすきをばなは

穂に咲けど

秋の花ゆる

さびしかろ

戀は捨てても

空見れば

思おもひ出だされて  
さびしかろ。

麻あさ幹か畑

お竹たけ 十七

麻あさ幹か畑

麻あさの葉はでさへ  
枯かればさびし

お竹<sup>たけ</sup> 十七

麻幹畑<sup>あさからばたけ</sup>

なじよにしましヨと

ひとりで泣<sup>な</sup>いた。

おけら

左官<sup>さくわん</sup>が 左官<sup>さくわん</sup>が

藏建<sup>くらた</sup>てた

おけらが三匹<sup>さんびき</sup>

出<sup>で</sup>て啼<sup>な</sup>いた

大工たいくが 大工たいくが  
家建いえたてた

お月つきさん ほかんと  
眺ながめてる。

# 子安貝

渚なぎさの 渚なぎさの

子安貝こやすがひ

波なみ 波なみ  
どんど



子安貝こやまがひ

今日けふから ふたりで

暮くしませう

お前まへも

わたしも

子安貝こやまがひ

づぶらゝい

づぶらゝい づぶらゝい

日ばかり暮す

今朝も とつぷりこと

づぶらゝいで寝てる

「起きてくれろ」と

あぐらこで言へば

びかん びかんと

眼ばかり出した

壁の隙間さ

天日のさすに

「外は風だ」と

つぶりで寝てる。

## 一軒家

姉は男に

だまされた

野中の一軒家の

きりぎりす

機場に賣られた

妹は

とんがらがん とんがらがん

暮してゐる

姉は 男に

だまされた

野中の一軒家の

さりぎりす

青い芒に

降る雨は

ちんちりりん ちんちりりん

降りました。

武藏野

武藏野に咲く

一輪の

花はやつれて咲きました

「君は 君は」と

武藏野の

草の中から咲きました

わたしの胸に

戀の日の

花は再び咲くでせうか

草くさの中なかから

武藏野むさしのの

花はなはやつれて咲さきました。

かなく蟬

初戀はつこひでせう 春戸山せとやまで

かなかな蟬せみが

鳴ないてます

別わかれて遠とほき君きみゆるゑに

「別わかれました」と  
言いひました

初はつこ戀こひでせう 脊せ戸こ山やまで

かなかな蟬せみが

鳴ないてます。

お  
か  
よ

去きょねん年ねん 七しち月がつ

木き小こ屋やの脊せ戸こだ

月つきもお暈かほを

召めしてた晚ばんだ

草の露さへ

さら／＼してゐる

泣いて別れた

忘りヨか おかよ。

白露虫

かけろふの

あしたはまたぬ命だと

たよりは来たが

どうしよう



ひとつにはまたひとつには

かすかに白しろき

花はなでせう

しよんほりとまたひとつには

さびしく咲さいた

花はなでせう

かなしくもまたふたつには

涙なみだに咲さいた

花はなでせう

かけろふの

糸いとより細ほそき命いのちだと

たよりは来たが

どうしよう。

雁

今朝も 南へ

下總しもふさの

雁かりが啼なき啼なきたちました

つらな づらなと

下總しもふねの

風の吹くのにたちました

親おやと別わかれた

故郷ふるさとの

空そらを見てゐた雁かりでせう

旅たびの身みゆるゑに

下總しもふねの

風かぜの吹くのにたちました。

乙鳥

逢あひはせぬかよ

十六島しほ

潮いたこ來出島でじまの

ぬれ乙鳥つはくらに

潮いたこ來出島でじまの

ぬれ乙鳥つはくらは

いつも春來はるきて

秋歸あきかへる。

空飛ぶ鳥

赤いはお寺の

百日紅

白いは畑の

蕎麥の花

空飛ぶ鳥ゆる

巢が戀し

別れし子ゆるに

子が戀し

木瓜の花咲く

ふるさとの

國へ歸れば  
皆戀し。

枯山唄

潮來出島の

五月雨は

いつの夜の間

降るのだろ

枯かれて吳くれろと

枯かれ山やまの

風かぜは幾いくにち日

吹ふいただろ

常ひたち陸か鹿し島まの

神かみ山やまに

己おれが涙なみだの

雨あめが降ふれ。

祇園町

友禪ゆぜんの赤あかく燃もえたつ

祇園町ぎおんまち

銀ぎんの糸いとの

雨あめは斜ななめに降ふりしきる

澁色しぶいろの蛇へびの目めの傘かさに

降ふる雨あめも

上うへに下したにと降ふりしきる

鴨川かもがはの河原かはらに啼ないた

河千鳥かはちどり

君きみと別わかれた路次口ろじぐちに



雨はしきりと降りしめる。

霞の中

甘茶が

沸いた

茶が

沸いた

茶が

はねた

甘茶が

中で啼く

小鳥も霞の

鐘は霞の  
中で鳴る

甘茶が

こぎた

茶が

こぎた

茶が  
燃えた  
鐘は霞の  
中で鳴る。

はねた  
花も霞の  
中で咲く  
甘茶が  
燃えた

戀の日

春の名残の

暮るる日に

紅き花さへ

惜みたり

夕べ 畑で

戀人を

待ちしも

今は昔なり

夏のをはりに

露草の

白き花さへ

惜みたり

河原の岸で

戀人と

泣きしも

今は昔なり。

澤の螢

一  
二  
三

野寺の

鐘が鳴る

顔

蒼白き

旅人よ

野寺の

鐘は

野に響く

蜻蛉は

沼の

藻の花に

露は

草木の

葉に降つた

豌豆の花

澤さはの  
螢ほたるは  
皆みな燃もえる。

豌豆の花

おたよ はたち 二十だ

二十一だ

嘘だ うそ はたち 二十だ

二十一だ



おたよ 畑はたけで

なにしてた

赤あかい豌豆わんさうの

花はな見てた。

# 島

沖おきの小島せじまは

身みをやつす

離はなれ小島せじまも

身みをやつす

離れ小島は

皆戀し

沖の小島も

皆戀し

島の岸打つ

波でさへ

沖の小島に

身をやつす。

散る花

お別れしましヨと

散る花は

心で泣いてるたでせう

泣きませぬよと

言ふけれど

涙でうるんで居りました

泣いて別れた

花ならば

可哀想ではないでしヨか

どうせ一度は

別れねば

ならぬ二人でありましょが。

### 土蔵の壁

わたしの胸の

戀の火は

いつになつたら

消えるでせう

竈かまどの土つちは

樺かは色いろの

焔まのほに燃もえてをりました

君きみはたしかに

夕暮ゆふぐれの

野のに咲さく花はなの

露つゆでせう

土藏どそうの壁かべに

相合あひあひの

傘かさにかかれてありました。

悲しき戀

愛あいしますよと

かすかだが

胸むねの底そこから響ひびくでせう

忘わすれませぬよと

かすかだが

ほろり涙なみだが落おちました

君きみもわたしも

はかなさは

枯かれて名なもなき草くさでせう

死しんで了しまへば

それなりに

消きえて跡あとなき二人ふたりです。

### 儂おぼき日

君きみのたよりの

來きた日ひから

かなしい噂うわさがたちました

水みづに流ながして臭くれろとは

夢ゆめと思おもへの

謎なぞか知しら

走はしり書がきだが

假か名な文も字じで

「涙なみだ」と記しるしてありました

水みづに流ながして臭くれろとは

熱あつい涙なみだの

事ことか知しら。



草 蒨

赤い花なら

燃えろと思へ

若い娘は

皆身が燃えろ

白い手拭

うしろに結び

赤い花だと

身ばかり燃やす。

下總のお吉

去年きまねん 別わかれた

下總しもふさの

お吉おきちは今いまも

居ゐるだろか

浮草うきぐさの花はなかと

聞きけば

浮草うきぐさの

花はなだと泣ないた

下總しもふさの

お吉おきちは今いまも

居ゐるだろか

己おれを待まち 待まち

下しも總もに

嫁よめにゆかずに

居ゐるだろか。

十文字

道みちの 十文字もんじで

鳥からすが啼ないた

不ふ思し議ぎ 打うち打うち

鳥からすが啼ないた

何んのことだろ  
胸まで響く

今日もかんばんり振つて  
また啼いた。

### 渡り鳥

渡り鳥が渡つてぐ

枯れ山の

小笹の上を渡つてぐ

渦巻きの渦を巻き巻き

枯れ山の

小笹の上を渡つてぐ

枯れ山の小笹の上に

渦巻き

渦を巻き巻き渡つてぐ。

お春娘

一

お春娘は

麥刈りしてる

足のかかるとに

「どうだ」と聞いた

親おやも親父おやぢも

天上てんじやうつら面めんしてゐる

日和ひより駒下駄こまげたは

ほつこくだ。

二

朧月夜おぼろつきよは

ほんやりしてゐる

お春娘はるじよめも

ほんやりしてゐる

風の吹く夜は

風呂場に来てた

切れて了へば

つんけくだ

三

お春娘は

蒟蒻玉見てる

眞の闇夜は

下半月だ

お春娘も

下半月だ

續く闇夜は

とんけくだ

四

お春娘は

「やだよ」とゆふた

「ほんに さうか」と  
窓から見てた

雨の降るのに  
甚句で通る

蛇の目傘は



かつほくだ

五

早いはや月つき日ひだ

もう十八だ

可愛かあい男をとこも

持もつも齡とし頃ころだ

お春はる娘むすめは

出でてで空そら見みててる

男をとこ 空そらから

降ふつてつ來こよこか。

磯の上

親おや戀こひしがりの子こ雀すずめよ

親おやが戀こひしく

海うみへ來きたのか

蛤はまぐりになつて了しまつた

親おや雀すずめは

お前まへのことは忘わすれてゐるぞ

いくら待まつても

元もとの親おやには逢あはれないのだ

歸かへれ 歸かへれ

海の端で日が暮れたら

子雀よ

本當のはぐれ雀になつてしもうぞ

親の古巢に

妹は

姉はゐないか子雀よ

遙に遠き

沙原に

もう日は山から暮れて来る

海 鴨よ

子雀は磯にとまつて動かない

だまして山へ歸さぬか。

芒の葉

「死なば共だ」と

新吉さんは

裏の お玉坊と

畑で泣いた

ウンニヤ 新吉しんきちさんは

小指こゆびの先さきを

細ほそい芒すいさの

葉はで切きりました

裏うらの お玉坊たまぼうも

泣なきく指ゆびを

共ともに芒すいさの

葉はで切きりました。

生姜畑

枯れ山の

芒ア穂に出でちらつくが

赤い畑の唐辛

帯にしめよか

襷にしよか

どうせ畑の唐辛

石を投げたら

二つに割れた

石は磧で光つてる

安が女房の連ツ子は

しよなりくくと

もう光る

生姜畑の

闇の晩

脊戸へ出て来て光つてる。

風が吹く

己の家の

うしろの沼に風が吹く

實にしみぐ

風が吹く

見れば見るほど

風が吹く

山の方から

風が吹く

広い河原の

砂利石に

風は鳴り鳴り

吹いて来る

己が生れた

この村の

井戸の釣瓶に

風が吹く

風は鳴り鳴り



吹ふいて來くる。

篠  
藪

蝸かたじけなく虫むしよ

黙だまり腐くさつた

蝸かたじけなく虫むしよ

渦うずを卷まいてる蝸かたじけなく虫むしよ

何なにが戀こひしい

篠簳しのやぶに

さらく、さらと雨あめが降ふる

夢現ゆめうつしに

己おれは暮くらした

蝸虫こぢしよ

己おれに悲かなしいコスモスの

花はなと花はなとに雨あめが降ふる

もう己おれの

家は最終さいしゅうだ

蝸虫こぢしよ

田たもいらぬ

畑はたけもいらぬ

篠簞しのやぶに

さらく  
さらと雨あめが降ふる。

螢草

垣根かきねの外そとに

來きては泣なく

故郷ふるさとの

戀こひしい唄うたに聞ききほれて

垣根かきねの外そとに

來ては泣く

下野の 機場に

しほむ螢草

垣根の外に

故郷の

戀しい唄を

聞いて泣く。

霜枯れ

裏の田甫で

鳴がゆふべ啼いた

ささけ畑の嵐の晩も

君は忍んで逢ひに来て

呉れた

裏の田甫で

鳴がゆふべ啼いた

鳴も田甫も霜枯れだけど

君は今夜も逢ひに来て

臭れよう。

お糸

雑木林の

啄木鳥は

杉の枯れ木を

啄いて啼いた

杉すぎの枯かれ木きを

啄たく木ぼく鳥てうは

無む性じやう やたらに

啄ついて啼ないた

掛かけた褌たふまの

解さけたも知しらず

涙なみだうかべて

お糸いとは見みてた。

麥の穂

ちら ぼら 麥の穂

出る頃は

こんく 狐の

目が光る

十六 酒屋の

姉 娘

こんく 狐に

ついてつた

酒屋のうしろの

篠藪に



狐きつねがまた来て  
覗のぞいてる。

女工唄

雨あめの降ふる日ひは

雨あめだれ

小こたれ

何なににも戀こひしくないが

公休日こうきゅうびが戀こひし

空の辨當箱

雨だれ

小たれ

腹の減るたび

故郷の親思ふ

いやな監督さんだ

雨だれ

小たれ

何にも戀しくないが

公休日が戀し

かかれくと

モーターが廻る

なににかかりませうか

雨だれ

小たれ。

## 人買船

人買船に

買はれて行つた

貧乏な村の

山ほととぎす

泣き泣き  
言ふた。

港は  
凧ぎろ  
日和は  
續け  
皆さん  
さよなと

本書の民謡は重に明治三十七八年前後（詩集「かれ草」發行當時）の作と同四十一年前後（詩集「朝花夜花」發行當時）の作と大正七八年前後（詩集「都會と田園」發行當時）の作とであります。早稻田詩社當時、早稻田文學、文章世界、中央公論、太陽、讀賣新聞そのほか二三の新聞雜誌に發表した凡そ七八十篇中の多くは散逸して本書に加へることが出来ませんでした。本書の「枯山唄」外數篇は本居長世氏の作曲によつて發表された最近の作であります。尙、西條八十氏、齋藤佐次郎氏より本書上梓について寄せられた好意と裝禎について林俊衛氏の注意とを深く謝します。

大正十年一月

「金の船」編輯所にて

著

岩

大正十年二月十五日印刷  
大正十年二月廿日發行

【定價金九十錢】



發行所

東京市神田區南神保町十六番地

尙文堂

振替東京一九三四  
電話九段一七五四

著作者

野口雨情

發行者

東京市神田區南神保町十六番地  
飯尾謙藏

所捌賣

東京東京東京東京

至誠館  
北隆館  
東海堂  
東京屋

大坂  
京都  
名古屋

三宅書店  
東枝書店  
川瀨書店  
菊竹書店  
大坪書店

印刷者 神田區西小川町二ノ五 上野喜一

抒情詩名作叢書

第一編 ▼ 西條八十先生著 二 袖珍箱入天金頗美本  
定價九十錢 送料六錢  
靜かなる眉

●西條先生が特に皆さんの爲めに、若き日の思出を唄はれたる幽艶芳麗にして、又高貴なる氣品は現代に並ぶ者なしとの定評あり。附録には最近の童謡中最も傑作のみ數多を收む。(十一版出來)

少女畫報主筆 水谷勝先生著 二 袖珍箱入天金頗美本  
定價九十錢 送料六錢

第二編 ▼ 寶石の夢

●まさる先生の御名は毎號少女畫報に發表の詩品に由つて諸君の方がよく御存じのことゝ存じます。温情優雅にして深刻なるは勿論抱けば口づけむ許りの床しき美しき詩集です。(忽三版發賣)

島崎藤村先生序  
柳澤健先生著

四六版箱入四百頁頗美本  
定價金二圓送料 金十錢

現代の詩及詩人

●詩壇批評家の第一人として、又詩人として名聲高き著者が我國新詩の勃興當時より今日に到る詩壇の變移消長を詳かに論述する傍、現代の詩人約五十名を捉へ一々燃犀銳利なる批評眼に照し、その特質長短を論じ盡したるもの。何人も本書によりて日本詩壇の古典派、羅曼派、象徴派、民衆派、人道派等の諸傾向及び其中心人物を悉く良解し得べし。猶附録には海外新詩の新傾向を窺ふに足る有益なる資料數篇を載せたり。

西條八十先生著

(近刊)

童話集 不思議の窓

定價金壹圓五拾錢の豫定

△少年少女の好讀物として責任  
を以て諸君に御すゝめすること  
が出来ゝるのを喜びます



